

## 北 京 の 春

弥 永 昌 吉 (数学・名誉教授)

3月末から4月初にかけ、2週間ばかり中国へ旅行した。吉川幸次郎氏を団長とする政府派遣の学術文化代表団に1員として加えられたからである。東大理学部に関係の近い団員として、茅先生や工学部の森口さんがおられたが、団員の中には人文科学方面の方が多かった。どうして私がこの‘代表団’に加えられることになったのか、私としては知る由もないが、昨年中国から来られた同様の代表団の中に著名な数学者華羅庚先生がおられたので、私も再会することができれば、と思った。また北京大学の段学復先生とは専門分野も近くかねて文通もあった。東大数学教室出身の劉璋温君も北京におられることを知っていた。私はずっと前——1931年と1934年に——昔の中国を通過したことがあるだけで、中国は私にとって未知の国であったが、機会があれば知りたと思っていた。中国出身で現在カリフォルニア大におられる数学者陳省身氏も、このごろはときどき中国へ帰られ、その途次日本に立寄ってゆかれる。そのほか前から知っている欧米の数学者で中国へ行かれた方もあり、そのお話も伺っていた。彼我学術交流を図るのは、もちろん結構なことなので、外務省からこの訪中団に加わらないかとのお話のあったとき、すぐ承諾したのであった。

日中両国は、一葦帯水とも同文同種ともいわれる一方、‘近くて遠い国’ともいわれている。国交回復や日中航空協定の締結等があつて、だいぶ‘近く’なつたとはいえ、社会制度が全くちがっていることは周知のとおりである。吉川団長も、両国の差違点をよく認識することから交流ははじまらなければならない、といわれた。

今度あちらへ行ってはじめて知つたのであるが、日中交流はもうかなり盛んに行われているようである。私たちが北京にいた間にも、日本からの何組かの訪中団に会つた。仙台市から来られた市長を団長とする百名以上の若い方たちの団体もあった。中国には対日友好協会というのがあり、そこで通訳、ホテル等のつごうのつく限り、日本側の希望に応じて受け入れられるだけは、次々と迎えているのである。

それでもまだ中国のことは、日本の一般の方々にとつて‘珍しい’のであろう。吉川団長は、朝日新聞に、曾野綾子さんはサンケイ新聞に報告を書いておられた。私も東京新聞に求められて、‘自然科学部門の日中交流’について書いた(4月17日夕刊)。その他にも、新聞雑誌

に出た記事やこれから出る記事があることであろう。先日、小堀さんに会つた折‘北京の春’という題で、理学部の‘広報’に書いて下さいませんか、といわれた。短いものなら、ということでお引受けした次第である。

——お引受けしたまでのことが長くなってしまった。東京新聞に書いたことをそのまま繰り返してもしかたがないし、専門的なことや細かいことは他の機会に譲つて、ここではごく大まかな一般論だけを書くこととしよう。

第1に、社会制度の差違のことである。北京でも、そのほかの町でも、町角の目につくところに‘毛主席万才’といったこと、あるいは毛主席語録からのことばが大きく書かれている。こちらの新聞で、ある大学の中国語の先生(中国系の方)が‘毛主席万才’というようなことをいわたのに対し、同じ大学の他の(日本人の)先生が非難されたという記事を見た。中国の新しい憲法(第13条)には‘大鳴、大放、大弁論、大字報、是人民群眾創造的社會主義革命的新形式’とあり、あらゆる批判を歓迎しているようであるが、‘社会主義’とか‘毛主席万才’は、中国ではやはり公理のようになっているのではあるまいか。

第2に、こういつた異なる制度下における交流は可能か、ということがあつた。東京新聞にも書いたことであるが、自然科学の方面では、人文科学方面などと比べて、すぐにも交流にとりかかることができそうである。中国でも生産を高めて全人民の住みやすい国を建設することを目標とし、そのためには自然科学が有用なこと、あるいは必要なこと、が認められているからである。そして‘科学に国境はない’からである。

第3に、しかし‘それだけでよいか’の問題がある。すなわち、住みやすい社会の建設に役立つ限りの意味においては自然科学上の交流をするが、‘気持ちの通じ合う’ことまでは考えなくてよいのか、ということである。私としては、それではやはり淋しいと思う。科学を通じての交流からでも、相互に学ぶべきところは学んで、‘人としての交流’ができるように、なるべく早くなれば、と思うのである。

私たちの訪れた北京は、春というにはまだ早かつた。楊柳未だ芽生えず、というところであつた。本当の‘春’が早くくればよいが、と思うのである。(1975.4.29)